

「胃と腸アトラス I/胃と腸アトラス II」

「胃と腸」編集委員会 編集
八尾 恒良 責任編集

獨協医科大学消化器内科教授

寺 野 彰

本書は、「胃と腸」誌に掲載された膨大な症例の中で典型的かつ代表的な症例を体系的に整理し、上部消化管を中心とした上巻「I」と下部消化管を中心とした下巻「II」に分けた大部の書である。本書の特徴は、貴重な各症例を、レントゲン、内視鏡そして病理各所見を有機的かつ統合的に理解すべく編集されていることであろう。最近軽視されがちなレントゲン所見が消化管疾患の全体的把握のためにいかに重要かを示しつつ、かつあくまでも局所的、表面的観察にとどまる内視鏡所見の限界を示し、近年の内視鏡至上主義に警鐘を鳴らしているようにもみえる。さらにこれら臨床所見も結局は病理診断に依存することになるのであるが、しかしそれも絶対的なものではなく、あくまで両者の統合的理解の下に診断は成り立つものであることを示している。

本書に採用された症例の各写真は見事なものであり、さすがに選りすぐった専門家の手になるものと感心させられる。症例によっては、やや古いものもあり、ファイバースコープ写真も多いのであるが、まれな疾患の場合にはやむを得なかったであろう。欲を言えば、各疾患の初めに記載されている病態の項がもう少し詳しくければ、若い消化器医には便利であろうと思われる。参考文献も推敲の上、必要最小限のものに抑えられているが、ここに採用された論文はそれだけ評価の高いものといえるのであり、読者は是非とも原著に当たられるようお勧めする。

筆者が読んでいるとき感じたことの1つに、編者は本書の読者層をどこに置いたのだらうということがあった。もし比較的若い層に焦点をあてたのであれば、症例の中には果たして典型例と言えるであろうかとい

うものもあり、若干の注意が必要であろう。典型例などはとくに卒業している層には、若干ひねった感じの症例や随所にちりばめられた極めてまれな症例が大いに参考となると思われる。また、編者も序文で述べておられるごとく、癌に関しては、本書のような体系書では満足のいく記載は不可能であり、近いうちに別の形で刊行されることを期待したい。

いずれにせよ本書は、20世紀におけるわが国の消化管疾患診断の集大成とも言えるものであり、21世紀を担う若き消化器専門医が座右に置くべき名著と言えるであろう。

I: ● A4 頁 388 2001 定価(本体 12,000 円+税) 送料実費

II: ● A4 頁 412 2001 定価(本体 12,000 円+税) 送料実費

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)